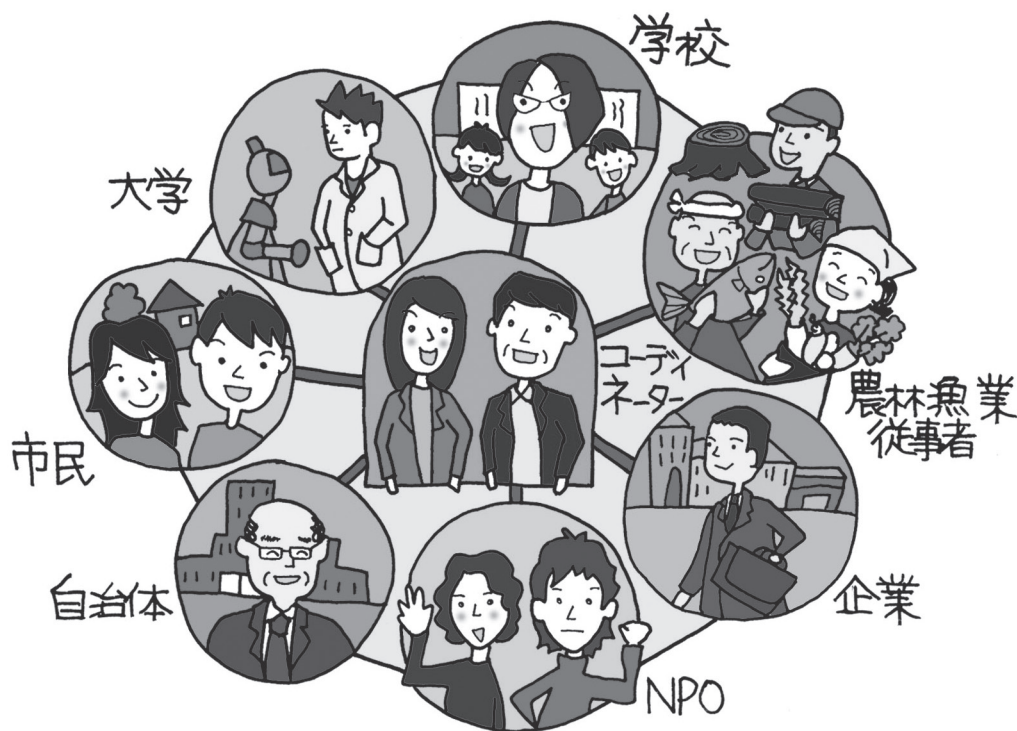


ESDコーディネーター・プロジェクト キックオフ号

2014年は「国連持続可能な開発のための教育の10年（以下、ESDの10年）」の最終年です。ESD-JはESDを大切な概念と捉え、その普及と実践に取り組んできました。そして、2014年までに、2015年以降もESDが各地で広がっていくための「仕組み」をつくろうと、この「ESDコーディネーター・プロジェクト」を立ち上げました。その目的は、地域のさまざまなコーディネーター的な人々にESDの視点と方法を共有することです。



この情報誌では、そのプロセスを、地域のさまざまな立場でコーディネーションを担っている方々と共有し、ともに考え、社会の仕組みを生み出す仲間づくりにつなげていきたいと考えています。

coordinate co・or・di・nate
コーディネーター
- [動] (他)
1 ...を対等 (同格) にする
2 ...を順序よく並べる
3 <-系統の各部分・動きを> 調整 [統合、一元化] する; <行動などを> [調整] する
—プログレッシブ英和中辞典

Contents

p2-5	ESD コーディネーター・プロジェクト キックオフミーティング報告
p6	ESD コーディネーター・プロジェクトの目的と概要 ESD-J事務局長 村上千里
p7	ESD コーディネーター・プロジェクトへの思い ESD-J代表理事 重政子 ESD コーディネーター・プロジェクトに期待します 社会福祉法人大阪ボランティア協会 常務理事 早瀬昇さん
p8-9	『未来へつなぐ』編集方針 ESD-J『未来へつなぐ』編集長 森良
p10-11	コーディネーター研修の現場から① 「千葉県コミュニティプランニングコーディネーター養成講座」 NPO法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク(COCOT)副代表 小山淳子さん
p12	ESD-Jのご紹介

ESD-J は、ESD コーディネータープロジェクト・キックオフの全国ミーティングを、2012 年 6 月 16・17 日の 2 日間、JICA 東京にて開催しました。この会合には全国から約 100 名の参加者が集まり、ESD を推進するコーディネーター像の共有と、育成に向けた課題、ESD コーディネーターが活躍できる仕組みのあり方などに関する議論開始の場となりました。

ESD-J 全国ミーティング 2102 プログラム：

6 月 16 日 2014 年に向けて（関係省庁からご挨拶）／現地報告「いま東北で」（報告は「ESD レポート」参照）
／基調提案「ESD コーディネータープロジェクトが目指すもの」／パネルディスカッション／ワールドカフェ
6 月 17 日 分科会「生物多様性を大切にしたい地域づくりに向けたコーディネーション」「学校と地域が連携した ESD のためのコーディネーション」「震災からの復興とコーディネーション力」／まとめのセッション
主催：ESD-J 助成：地球環境基金

基調提案「ESD コーディネータープロジェクトが目指すもの」

都留文科大学教授 高田研さん

2009 年から 2010 年にかけて行った環境省の調査研究事業「ESD コーディネーター育成あり方検討会」の提言内容について、当時座長を担われた高田先生よりご紹介いただきました。ESD-J のコーディネータープロジェクトは、この提言をベースに具体化していくものです。

「ESD コーディネーターとは資格を伴う固有の職種の名称ではありません。地域にはすでに実際にコーディネーターの役割を果たしている人がさまざまな場で活躍しています。こういった方たちに ESD の視点を共有化・意識化していただくことが大事だと考えました。育成の方法としては、すでに行われているコーディネーターの研修会に ESD の視点を組み込む組込型の研修と、実際にコーディネーターをしている方たちを集めてトレーニングをしてその成果を持ち帰っていただく OJT 型の研修が有効であると提案し、モデル研修を実施しました。それぞれに課題はありますが、ESD コーディネーターの育成とともに、彼らを支援する仕組みとしてのプラットフォームづくりが重要になると提言いたしました。」



ESD コーディネーターに重要な 7 つの視点

- ・ 地域と世界の持続可能性を視野に入れたビジョン
- ・ 地域の課題に取り組む一員としての自覚
- ・ 市民のエンパワーメントを促進する
- ・ 多様な主体の参加と協働を促す
- ・ 多様な課題を把握し、分野横断的な活動を促す
- ・ さまざまな主体が社会的責任を果たせるよう働きかける
- ・ 持続可能な社会に向けたビジョンの実現に向けた道筋を示し、それをプロデュース、マネジメントする

（環境省「ESD コーディネーター育成あり方検討会」より）

パネルディスカッション

「様々な分野のコーディネーターが ESD の価値共有・スキルアップするためのネットワーク形成に向けて」

パネリスト： 太田祥一さん（群馬県教育委員会生涯学習課）

小原宗一さん（日本ボランティアコーディネーター協会）

鈴木まり子さん（NPO 法人日本ファシリテーション協会フェロー）

コーディネーター：ESD-J 理事 森良

森：まずは自己紹介を兼ねて、コーディネーションで大切にしていることなどをお聞かせください。

太田：日系人が多い群馬県で「多文化共生の地域づくり」を担当していました。群馬県では多文化

共生＝外国人支援とは捉えません。地域にはさまざまな文化的背景を持った人たちが暮らしていて、それぞれの能力を活かせる地域づくりを多文化共生と定義しています。

県と NPO との協働事業を数年前からやっていますが、さまざまな NPO が手を挙げてくださり、こちらが想定して

いなかったような活動をしている団体がたくさんあることに気づかされました。活動している人はそれぞれの分野で専門職としてかなり意識を持っている人で、そういう人たちを育成するのではなくその人たちに地域のリーダーになってもらえればよい。



ンという地域のコーディネーターになれるような研修を組み込んだり、専門職との連携のため、ソーシャルワーカーや社会福祉士といった人たちに向けて多文化共生のことを知っていただく研修を行っています。

小原：日本ボランティアコーディネーター協会が考えるボランティアコーディネーターの基本指針として、「どのような社会を目指すのか」という項目に幾つかキーワードが挙がっていて、「自然環境を守り、命を受け継ぐことのできる持続可能な社会を目指すのが我々の価値観だ」とうたっています。そこに ESD の価値を組み込んだり共有したりしながら、人材育成や我々の機能を高め、専門性の強化ができていけるといいなと考えています。



鈴木：分野を問わずに市民の小さなつばやきを拾いその学びあい活動を実現するためにお世話をする、必要に応じてつないだりプロデュースしたりファシリテーターとして促したりする、それが自分の役割だと思っています。大切にしていることは、相手の価値観に応じてお世話をするという事です。相手が一番エンパワーメントされるのは何かということを常に意識してつないでいくようにしています。



コーディネーターとして人をつないだり分野を超えて関わったりする際、つなぐその相手をどうエンパワーメントするのか、ESD の視点をただ伝えるのではなく、相手の活動に沿いながら伝えていくことが大事だと思います。

森：三人のお話から、「未来を見つめる」「持続可能な社会をどうつくるか」「相手に寄り添う」という共通キーワードが見えてきたように思えます。相手に寄り添いつつどう未来をつくっていくのか。未来を目指すことはみんな言えるけれど、相手に寄り添わないと一緒に議論できません。相手の意見が正しいかは別にして相手を認めること。違う立場の人が未来を見つめて一緒に働くということ。つまり協働していくということ。そのためには、共通の議論の場を持つ。この場合における ESD の価値とは何でしょうか。またそれを共有していくにはどうしたらいいでしょう。

太田：意識を持って活動されているボランティアの方たちの課題を拾い上げて解決するための考えを出す、うまく拾い上げる仕組みも ESD ではないでしょうか。

鈴木：ESD の価値は、分野を超えて同じ価値を持つ人びとをつなぐことができる場所だと思います。

小原：価値の共有は価値を一致させることではありません。対立はたくさんありますが、その中でそれぞれの価値を共有する場づくりやお互いを理解できるプロセスをどう構築するのか、だからこそファシリテーションがとても大事になります。

太田：ボランティアは舞台でいうところのアクターです。ディレクターとプロデューサーがいないと演劇は回りません。コーディネーターはディレクター・プロデューサーの位置に立っているんだと思います。

鈴木：名前よりも機能が大事だと思います。コーディネーターの肩書ではなく、いかにコーディネーションできる人を市民のなかに増やしていくか。

小原：コーディネーションできる人をどう増やすのかはすごく大きな課題です。単なるマッチングだけのコーディネーションではなく、協働するためのプラットフォームをどう提供するのか。共通の価値観によるプラットフォームをつくるのがコーディネーターの役割だと思います。

太田：地域のプラットフォームについては、事務所を持ったり人を雇ったりというハード的なものではなく、地域の課題を地域のネットワークで解決できる仕組みづくりといったソフト的なつながりを想定しています。有志の人たちがやっていますが、価値観の共有は難しくいろいろな価値観が並列しています。

森：よりよい未来を目指していくのも一人ひとり違う。議論していくためには相手の課題をしっかりと聞き相手の背景を考えて話をする。コーディネーターはそれができないと成り立たない。これが一つ見えてきました。みんなの中にある未来をどう引き出して見えるようにして話し合うのか。地域の性格を学ぶときには歴史的な視点が必要です。自分たちの地域を深く掘りさげることによって未来が見えてきます。ESD コーディネータープロジェクトは、みんながコーディネーターになるのではなく、コーディネーションにみんなが関わって協働の推進者になるということです。そのために何ができるかについて、この後のワールドカフェと明日の分科会で話し合ってもらえればと思います。

分科会

全国ミーティングの2日目は3つの分科会に分かれ、それぞれのテーマごとに、コーディネーション、コーディネーターについて話し合いました。

I 分科会

生物多様性を大切にされた地域づくりに向けたコーディネーション

コーディネーター：ESD-J 理事 大島 順子、新海 洋子

話題提供①：笹木智恵子さん（NPO 法人ウエットランド中池見）

中池見湿地は福井県の敦賀市にある湿地帯です。江戸時代に開墾されそれが今でも残っているのですが、湿地帯は開発業者にとって都合のいい場所で、埋め立てられて工業団地へと変化していく、そんなものを子どもたちに残すのが嫌だという漠然とした想いで、まず敦賀市民に知ってもらうために湿地の観察会を始めました。

新聞が取材に来てくれてそれがPRになって少しずつみんなが知るようになっていきました。92年に天然ガス基地が誘致される計画が発表され、大学の先生とか専門家の人たちが調査をしたり動いてくれるようになりはじめました。専門的なことは任せて、自分たちができることとして敦賀で起きていることの情報発信を続けていました。素人の私たちが「どうしたらいいの？」と発信しつづけていたら、「それに手を差し伸べないわけにはいかないだろう」といろいろな人たちが力を貸してくれるようになりました。そうやってお互いのできるどころが重なって、中池見の活動になっているのではないかと思います。

話題提供②：久高将和さん（自然写真家）

沖縄県北部のやんばるの豊かな自然に開発が入ったのは昭和30年代でした。多勢に無勢、いつも行政と一人で対立していました。地域とはどういうものなのかをきちんと学ばないとなりません。気づいたらなくなっていたとなる前に、知ることから始める。悪意ではない理解不足によって引き起こされたものが地域文化をゆがめてしまうことがあります。

実は私は人前で話すこととかは苦手なんです。でもこういう活動を無理にやっている意識はありません。気がついた人間が動けばいい。そうしないと周りも気づかないから動かない。動いて経験したことを自分の言葉で、それが説得力を持つんです。知識がないことを恐れず、わからないことをどんどん楽しむという姿勢でやってきています。

【I 分科会のまとめ】

コーディネーターには、「皆に助けを求める」スタイルと「自分自身で動き働きかける」スタイルの2つがあることが確認できた。コーディネーターに必要なスキルは、よく見る力、地域

とともに学び続けること、地域のキーパーソンとつながり続けられること、各主体の発言をそのまま受けるのではなく関係性を批判的に見ていくこと。そういったコーディネーターが育っていくために、まずは「自分事」として捉える姿勢、その上で個人の限界は協調で乗り越える、知識が足りないことを恐れずむしろ学べることを楽しむというスタイルがいい。また、メディアなどの外の力は影響を与える点で有効だろう。

II 分科会

学校と地域が連携した ESD のためのコーディネーション

コーディネーター：ESD-J 理事 池田満之、鈴木克徳

話題提供①：中谷愛さん（多摩市教育委員会）

多摩市は2009年より「2050年の大人づくり」を合言葉に、ESDに取り組み始めました。教員を対象にしたESDを始めようとしたとき、学校と地域の連携をふまえ、地域で活動されている団体の方々に教員の研修会に招くことになりました。それをコーディネーションするためにつながりうる団体を探して協力を要請。20団体が参加していただきました。

「教育」というミッションに地域の方々との関わりを含ませるとき、「多摩市の子どもたちにどのような能力や態度を身に付けさせたいか」というビジョンを共有しようとしたところ、「人と関わるコミュニケーション力だ」ということで一致しました。ESD推進4年目を迎え、赴任したばかりの教員にとっては、こうした研修会に参加することが、地域理解を深めていくよい機会となっています。

学校を支援できる情報を発信することで、地域の方々が学校教育に参画できるようになります。今後も、これまでに学校と地域が連携してきた成果を発信したいと思っています。また、市民向けの講座も開催し、参加者が友人をつれてくることでネットワークをひろげていければと考えています。

話題提供②：羽澄ゆり子さん（多摩市立連光寺小学校教育連携コーディネーター）

連光寺小学校は公園や雑木林など自然環境に恵まれています。10年前に「総合学習」が始まる中、「自然学習」に着目。人と社会と自然の関わりを地域のなかで学ぶことにしました。地域とのつながりのコーディネーションでは、まず事前と事後の打ち合わせが大切です。講師としての地域の人に丸投げではいけません。次に大切なのは継続すること。あとはお互いにメリットのある活動にしていけること。お互いに「やってよかった」



笹木智恵子さん



久高将和さん



中谷愛さん



羽澄ゆり子さん

と思えることが大切。専門家の人たちからも「地域と交流できて情報交換ができてよかった」という言葉が聞かれます。地域学習の教材の成果が生まれ、専門家の研究へのフィードバックも得られました。

【II分科会のまとめ】

学校でESDを進めていくには、ボトムアップでは限界があるので上からもESDを強く推進するということが必要。コーディネーターは重要で育成が望まれるが、その先の活躍できる場をつくることが課題。地域との関わりを持つ場を授業のみでつくるのは難しいので、課外活動などを活用するとよい。学校行政が地域を継続的に巻き込んでいき、ともに学習プログラムをつくりあげていくのがよい。その際には成果の評価も具体的にしていくこと、皆が振り向ける（共有できる）キーワードをテーマにして取り組むことが有効になる。

III分科会

震災からの復興とコーディネーション力

コーディネーター：ESD-J理事 壽賀一仁、長岡素彦

話題提供：阿部正人さん(南三陸町立伊里前小学校教諭)

私が住んでいる気仙沼市の小泉地区では、3.11の二日後にはもう避難所のなかでの仕組みができあがっていました。田舎なので青年部とか消防団とかいろいろな組織に人がだぶって所属していて、元から顔が見える集まりだったから運営もスムーズにきました。日常のつながりが非日常に生きることを実感しました。

各地からの支援物資の中でマウンテンバイク100台もらってくれないかという話があり、中学校の校長先生などに相談しながら話がつながっていきました。気仙沼の歌津ではマウンテンバイクの大会がずっと続いていて、それが震災でできなくなりました。この大会を復活させることが復興の一つではないかと、地元の人に持ちかけました。そして「やってみようか」ということで動き出したんです。

今回のような事態になったとき、「これまでの取り組みを復活させる」という試みはすごく背中を押してくれます。1年経った今年の5月について復活の大会が催されることになり、以前は100人程度だった大会に全国から200人も参加者がありました。「これまであったものをこれまで以上の発展につなげる」。ここで元気になるのは地元の人で、活躍するのも地元の人です。こちらからの提案を受けて話し合っただけで疑問の声も出て、でも形として見える状態になっていくことでだんだんと変わる。このとき、情報の共有がとても大事になります。

【III分科会のまとめ】

一方的で双方向になっていない形、たとえば専門家が市民に対して、市民が行政に対して、あるいは行政が市民に対して、スキームをつくり提供しているような形はコーディネーションではない。コーディネーションが機能するためには、地元のコーディネーター（「結」のような伝統的な集まりなど）との連携が必要である。重要なのは、「新しく共有できる価値を生み出し、新しい方法やアイデアを提案し、実行すること」。コーディネーションには寄り添う姿勢が大事で、一方的ではなく、ともに提案し合い、ともに解決していかなければならない。

～各分科会で聞こえてきた声～

(I分科会から)

- コーディネーターは地元の人たちを知らなくては戦略を立てられないんですね。
- 学びながら助けてもらいながらいろんな人の力を巻き込むのもコーディネーターのスタイル。
- 活動の継続性や育成、全部やっていくには何かしらの組織があった方がよい。その時に行政をうまく使うという考え方がしっくりする。

(II分科会から)

- やはり既存の制度にESDの視点を組み込むことが有効ではないか。
- 学校に参画するのをコーディネートする際、「人や自然、他者への思い」というESDの視点を入れることが大事。
- 多忙な教員の代わりに市民から提案。しかし市民に仕事を丸投げされないようにするためには教育委員会の手を借りてフォローしてもらうことが必要。教育委員会に振り向いてもらうには「皆で共有できて使っていける」キーワードが重要。
- コーディネートする主体も教育委員会や大学などいろいろあるのでそれらを見つけることが重要。

(III分科会から)

- コーディネーションという機能には、誰かをコーディネーターにしつつコーディネーターにみんなが乗る力も必要ではないか。
- 知る機会は絶対必要。地域の地理と歴史は大切。過去の情報や新しい取り組み情報を共有しておくことが必要。災害対策もそこから考えるべき。
- 外から支援するとき現場のニーズをどこまでくみ取るか、その難しさや大切さを実感した。あくまでも地元の人が主役ということを基本に据えなければならない。
- 地域の人にも忘れていない場合がある。地域に何があるかを言える人がコーディネーター。



話題提供を
いただいた方々

阿部正人さん

(取材／文：中川哲雄)

● ESD コーディネーター・プロジェクトの目的と概要

「未来をつくる人づくり」を生み出すコーディネーターがもっと活躍できる社会の仕組みをつくりたい

ESD-J 事務局長 村上千里

環境破壊、貧困・格差の拡大などの問題を抱える今の社会は“持続不可能な社会”です。これを“持続可能な社会”に変えていくためには、問題解決を政治家や専門家に任せてしまうのではなく、市民一人ひとりが未来をつくる一員として、学び、考え、行動する力を身につけて、社会に参画していくことが大切です。ESD はそのための力や価値観を育む「学び」や「活動」の総称、平たく言えば「未来をつくる人づくり」です。

目指しているのは「市民力」を高め、「誰もが安心して安全に、そして公正に暮らしていけるような社会」を、民主主義を通して実現していくこと。そのために、大人も子どもも、知識獲得のみにとどまらず、参加や体験を通して自ら感じ考えることを重視し、現実社会の問題解決や地域づくりに一歩踏み出す経験を積み重ねることが重要です。

そのような学びの場は、多様な主体の協力によって生み出されます。ESD 的な活動が、全国いたるところで行われるようになるためには、それを進める施策が不可欠であり、その要となるのが「コーディネーターを支える仕組み」であると私たちは考えています。

学校と地域のさまざまな主体をつなぎ、教員の ESD カリキュ

ラムづくりを支援する。地域において、さまざまな課題解決の場に市民の参画を促していく場をつくる。社会の課題解決に向けた多様な主体の協働を促す。そのようなコーディネーターが全国各地で活躍している状況を生み出す仕組みづくりに、私たちは 2014 年までの残り期間、全力を挙げて取り組んでいきます。

地域には、市民参加のコーディネーター、ボランティアコーディネーター、社会教育主事、教育支援コーディネーター、まちづくりコーディネーターなど、さまざまなコーディネーターが活躍しています。本プロジェクトは、これらのコーディネーターの皆さんに ESD という考え方や手法を共有してもらうこと、そしてコーディネーターという職にはついていなくとも、社会の課題に取り組んでいる方々が多様な主体と連携していくための力（仮に、ESD コーディネーション力と呼びましょう）を強化することを目指し、研修カリキュラムの開発やテキストブックの制作に取り組みます。そしてそのような方々のネットワークを各地に、そして全国レベルで生み出すことを目指します。

ESD-J は、ESD 推進機関やコーディネーター養成機関などと協力し、このプロジェクトを通して、ESD コーディネーターネットワークのコアを作っていきたいと考えています。どうぞご協力・ご参加ください。

〈ESD コーディネーター・プロジェクトの柱〉

① ESD コーディネーター育成カリキュラムの開発

ESD の視点を持ったコーディネーションのあり方を学ぶスタンダード・カリキュラムの開発や、さまざまな立場のコーディネーターが集まり、互いの取り組みから学びあながらスキルアップを目指す「学びあい型」「OJT 型」等の研修のモデルづくりなどに取り組みます。

② ESD コーディネーター・テキストブックの制作

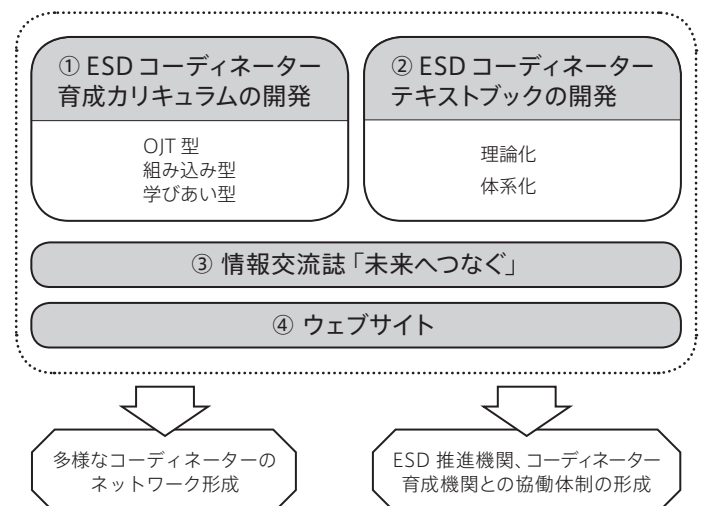
多様な立場のコーディネーターに、ESD の視点や手法を学んでいただくためのテキストブックを開発します。これまで出版されてきたさまざまな教材をもとに、ESD と ESD コーディネーターについて、理論化・体系化に取り組み、その上でハンディでわかりやすいテキストを生み出したいと思っています。

③ 情報交流誌『未来へつなぐ』の発行

ESD の視点からコーディネーターのスキルアップとネットワークを進める情報誌、編集方針は p8-9 をご覧ください。

④ ウェブサイトにおける「ESD コーディネーター・プロジェクト」ページの運営

プロジェクトの進捗やコーディネーター育成に関するさまざまな情報を共有できるアーカイブを作成予定です。公開は冬頃になる予定です。



※このプロジェクトは、地球環境基金および Panasonic NPO サポートファンドの助成をいただいて実施しています。

ESD コーディネーターの輪を広げましょう

ESD-J 代表理事 重政子



日本国から提案された“国連 ESD の 10 年”の最終年合は 2014 年、日本で開催されようとしています。提案作成当初から ESD 推進の一翼を担ってきた ESD-J は、2014 年の先を見越した方策の一環に ESD コーディネーターの充実を図るプロジェクトを立ち上げました。

“地球上のあらゆるものが公平で平和に持続していくためには、人が知識を得、意識を変える「教育」が必要である”とする ESD は、リオ +20 の合意文書でも、“ESD の 10 年終了年を超えてなお、ESD を推進することが必要”と確認されました。

また、“自然資本を国家勘定・企業会計に組み込む”世界銀行提案のプロジェクトや、国連環境計画発表の「自然資本宣言」の報告からは、市場原理が行き過ぎた結果とも言える地域破壊の現実的な課題を克服し、地域の人と自然を尊重し活性化していく道を開いていく地域づくりの大事な観点が浮き彫りになっています。

地域には、市民活動・学校支援・行政施策・企業の CSR 等、さまざまな立場で地域の課題を見つけ、その問題解決に骨身を惜しまない活動をする人々がたくさんおられます。その人々の努力によって活動成果は形になって効果をあげて来ています。この活動をより ESD 的につなぎ、付加価値をつけるのがコーディネーターの皆さまの役割です。市民が自分の寄って立つ地域に対して観点をひろげ、観点を転換し、地域づくりに参画できるようにすることでエンパワーメントする、そこに関わることで自分がコーディネーターにとっての学びであり、課題の解決であり、スキルアップにつながることを考えます。本プロジェクトをきっかけに地域で ESD の推進力になって下さる志高いコーディネーターが増えることを期待いたします。

期待してます！

ESD コーディネーター
・プロジェクト

今の時代だから求められるコーディネーター

社会福祉法人大阪ボランティア協会 常務理事 早瀬昇

(ESD-J 基盤強化プロジェクトアドバイザー)

さまざまな「コーディネーター (coordinator)」が、各方面で活躍しています。インテリアコーディネーター、ファッションコーディネーターなどは古くから知られていましたし、実はボランティアコーディネーターも大阪ボランティア協会が養成講座を始めたのは 1976 年。かなり歴史があります。

このコーディネーターが担う coordinate の原義は、本誌の冒頭にあるように「対等に結びつける」こと。近年、この役割が各方面で重視されるようになってきたのは、さまざまな人や組織、要素などを把握し、それぞれの立場や状況を調整しながら結び付けていく必要が高まっているからです。

なぜか？ 良く言えば「専門分化」、悪く言えば「タコ壺化」や「対立」ないしは「孤立」が広がる中、「つながらない」状況が深刻化しているからです。だからこそ、「つなぐ」存在が大きな意味をもつようになってきました。

また、ESD コーディネーターは人々の「学び」を通して「持続可能な社会づくり」を進めますが、そのキモは「学びを通して」という点でしょう。「学び」を重視することは人々が変わり得るのだと信じることで、学んだ人々が主体となって状況を改善する未来を目指すものでもあります。つまり、あらゆる人々の主体的な参画によって事態を改善していこうということ。この姿勢は、社会問題を解決していく上で、広く共有されるべきものだと思います。

こんな ESD コーディネーターの各方面での活躍を期待しています。



1955 年、大阪生まれ。日本 NPO センター代表理事、日本ファンドレイジング協会副代表理事、環境市民理事、「新しい公共」推進会議構成員、関西大学客員教授なども務める。『寝ても覚めても市民活動論～ミーティングや講座の帰り道に読む 35 の視点』(大阪ボランティア協会) など著書多数。水瓶座。

地域におけるコーディネーターのネットワークが必要

わたしたちが働きかけようとしているコーディネーターとは、地域のどんな人たちをイメージしているのか、そこから話したい。

まず第一に想定しているのは、各地域の中間支援組織（ボランティアセンター、市民活動センターなどのボランティア・市民活動のサポートを行う団体）や社会教育施設などで働く「コーディネーター」という役割を担っている人たちである。窓口に来るさまざまなニーズを持った人たちに、手元のリストから既存の団体や人材を紹介する（マッチング）だけでなく、学びの場や参加の場、協働事業などを生み出す支援を行うという重要な役割を担っている。人々が抱えている課題は、既存の行政、企業、NPOなどの社会サービスで解決できていないことのほうが多いので、マッチングだけでは多様なニーズに答えたり、ひとりひとりの市民の思いを形にすることは難しいからだ。しかしながら、このような現場では、コーディネーションの意義がなかなか理解されていなかったり、またコーディネーター自身経験が少なく、専門的な訓練を受けることができていない人も少なくない、という課題を抱えている。

二番目に想定しているのは、市民活動、地域活動の要の位置にいて、多様な主体の連携や協働を模索している人たちである。例えば近年、川の清掃や美化などで流域のさまざまな主体（市民団体、自治会等地縁団体、企業、行政など）が連携して活動することが増えている。川の清掃活動には、そこにかかわる人や組織が広がることで、川辺の整備やビオトープづくりに広がったり、体の不自由な人たちが自然や川に親しむための環境づくりにつながったりする。このような発展的な連携を生み出す力を、多くの人が持つようになったら、地域の活動はもっと豊かになるだろう。

そこでわたしたちは、一つの地域の中で一番目の人たちと二番目の人たちがつながって、地域の課題やニーズを掘り起こし、思いを形にしていくことができるようなコーディネーターのネットワークづくりを推進していこうと考えている。このネットワークは、持続可能な地域づくりをすすめていくための重要なインフラとなる。そのために資することがこの情報交流誌の第一の使命である。



「分野を超えて連携する」「学びと参加をつなげる」コーディネーションが大切

地域にはさまざまなコーディネーターがいる。その人たちとぜひ共有したいコーディネーションにおける大切な視点が、「分野を超えて連携すること」であり、「学びと参加をつなげること」である。そこから持続可能な地域づくりで大切な、「自治の力」や「世界を見つめる力」がついてくる。

去る3月4日、東京で日本ボランティアコーディネーター協会主催の「全国ボランティアコーディネーター研究集会2012」が開かれた。わたしが担当した分科会「地域の未来の担い手づくりへ、出番と居場所をどうコーディネートするか～分野横断・協働型コーディネーションのツボ～」には定員20名を上回る50名の人々が参加した。いかに分野を超えたり、これまでの協働をステップアップしたいと願っているコーディネーターが多いかがわかる。

以下にこの分科会で話された「分野を超えたコーディネーションの課題と解決法のポイント」を紹介する。

- ① 「人が集う場」、「協働」のプロデュース
- ② ボランティアが主体性を持ち、継続するためのコーディネーション（得意なことを発揮することで生活が豊かになるという声かけ）
- ③ 見つける・育てる・活かす・引き出す
- ④ 分野の異なる人たちのネットワークづくり
- ⑤ 知るチカラ 情報の共有、発信、継続するチカラ
- ⑥ 枠を超える
- ⑦ 分野を超えた楽しいコーディネーション

この7つのポイントは、コーディネーターがまさに現場で感じている、コーディネーターに必要な視点や手法である。これを本誌2ページに掲載した〈ESDコーディネーターに重要な7つの視点〉と照らし合わせてみると、現場に必要な視点と方法が浮かび上がってくるのではないかと。

わたしたちは、本誌の発行を通して現場の悩めるコーディネーターの皆さんとともに、「分野を超えて連携する」「学びと参加をつなげる」コーディネーションを進めるための視点と方法を掘り下げ、明確化していきたい。



3つのテーマを掘り下げ、 課題解決の指針を探る

ESD-Jでは2012年1月に「関東ESDコーディネーターのあり方検討会」*を開催し、新潟、山梨を含む関東10都県からアクティブなコーディネーター10人を招いてワークショップを行った。

事前ヒアリングでそれぞれが抱えている課題を聞きだし、ワークショップでそれらを共有したうえで、「分野を超えて連携する」「学びと参加をつなぐ」コーディネーションを進めていくために、コーディネーター同士が掘り下げていくべきテーマについて話し合った。そして以下の3つが浮かび上がってきた。

- ①参加型の地域づくり
- ②市民のエンパワーメント
- ③コーディネーターのスキルアップとネットワーキング

本誌ではまず、これら3つのテーマを掘り下げ、課題解決の指針を提示することにチャレンジする。本誌は年3回発行するが、毎号2ページを割いて、各地域で行われているコーディネーター研修を紹介・分析すること、及び3つのテーマについての現場コーディネーターの誌上討論及び掲載後のオフ会討論を組織していく。

3つのテーマについて若干解説を加え、なぜこの3つを取り上げるのかを説明しておこう。

①参加型の地域づくり

これまでのまちづくりは、行政があらかじめ青写真を決め、そこに市民がアリバイ、お飾り的に参加させられていた。ここで言う参加型とは、調査・計画段階からの参加、実質的な参加のことである。ESDの方法の重要な特徴のひとつは、参加民主主義の実践であり、それこそが市民自治を切り拓く。

②市民のエンパワーメント

参加型の地域づくりは、主体的な市民の参加なしには成し得ない。ここでは、すでにNPOや市民活動に参加している以外の人、特に地域の活動から縁遠い30～40代のサラリー（ウー）マンや10～20代のフリーター、ニート、社会的弱者の人々などに焦点を当てる。エンパワーメントとは、釈迦に説法を承知で言えば、その人たちの持っているチカラを引き出していくことである。

③コーディネーターのスキルアップとネットワーキング

コーディネーターとは、異なる立場の人を対等にして出合わ

せ、持続可能な社会（地域）のビジョンに沿ってつないでいく人のことである。したがって、コーディネーターに必要なスキルは次の3つである。

- 1) 聴く
- 2) 問う
- 3) つなぐ

2) 3) と進むに従ってだんだん難しくなってくる。どのようにその力をつけていくのか？

また、コーディネーターが力をつけ、力を発揮していくためには、お互いを支えあったり、社会的認知を獲得していくためのネットワーキングが欠かせない。それをどうつくっていくのか？

ESDコーディネーター・プロジェクトの 進捗報告

ESD-Jは、2014年の「ESDの10年」最終年以降も引き続き、ESDを各地域及び全世界で発展させ、推進していくことが重要だと考えている。「リオ+20」の結果をみるまでもなく、いま世界を動かしている人の頭の中から「サステナビリティ：持続可能性」という言葉が逃げていってしまっているからである。

わたしたちは、1992年のリオの約束（アジェンダ21）から絶対に後退してはならない。双子の条約「気候変動防止条約」が約束するCO₂の削減：ライフスタイルの転換と、「生物多様性条約」の約束する自然との共生：生命文明への転換の道をしつかりと前に進まなくてはならない。

そのためにわたしたちは、学校や企業、地域、行政のあらゆる学びと活動の場でESDを広げつづける。

ESDコーディネーター・プロジェクトは、そのための要の位置を占めている。いま地域で活動しているあらゆる分野でのコーディネーターを持続可能な地域づくりのビジョンとESDの方法でつなげ、既存のすべての学習や活動をESDへと発展させていくことが求められている。

ESDコーディネーター・プロジェクトの4つのプロジェクト(①ESDコーディネーター育成カリキュラムの開発、②ESDコーディネーター・テキストブックの制作、③情報交流誌『未来へつなぐ』の発行、④ウェブサイトの開発・活用)の進捗状況を明らかにし、参画を呼びかけていく。

* 環境省関東地方環境事務所からの受託事業



千葉県コミュニティプランニングコーディネーター育成講座

NPO 法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク CoCoT 副代表理事 小山淳子



1. 育成講座のねらい

NPO 法人 CoCoT は、平成 23・24 年度「千葉県コミュニティプランニングコーディネーター育成講座」を開催している。本講座では、3.11 の震災後の課題を踏まえて、平常時と災害時のいずれにおいても高いコーディネーション機能を発揮する専門性とスキルを身につけたコーディネーターの育成を目的としている。その目的達成のために、コーディネーターに必要な不可欠な専門性・スキルを抽出し、習得することを目標とした。また、身につけた専門性やスキルを継続・発展させるためには、サステナブルな学習支援およびネットワーク形成が必要と考え、その体制づくりにも取り組んだ。

千葉県は、東京都に隣接した都市として住居地区となっている県北西部の一方で、東部や中南部では多くの地域で人口の減少している現状もある。それらを踏まえると、それぞれの地域特性や職場環境・雇用形態により、業務に対する考え方や取り組み方は、千差万別である。そのため、育成講座のプログラムは、地域特性を捨象した地域社会に対する働きかけについて共通の認識を導入の段階で持てるようにした。カリキュラムは、全体の構成を基礎領域と専門領域に分け、コーディネーターが持つコミュニティにおける役割の基本的な考え方や姿勢、基本技能を学ぶことを基礎領域とし、専門領域では現場研修も含めた応用技法の習得を目指した。

2. コミュニティプランニングコーディネーターとは

では、私たちが目指すコミュニティプランニングコーディネーターはどのようなものであろうか？ これまでのボランティアコーディネーターは、支援対象の基本を個人とし、地域社会の中で一人ひとりの人権が尊重される状態を作り出す専門職として位置づけられてきた。コミュニティプランニングコーディネーターは、基本を支援対象ではなく、プロセスに置いてある。極めて個人的な思いや不安要素を引き出し、社会的な俯瞰した視点から考察しその背景と潜在している地域課題を洗い出す。さらに、共感者、地域ネットワークへと段階的なマッチングとコーディネートを経て、課題解決に向かう。市民が地域の課題を自らの手で解決していくためのプロセスを作り出す専門職である。先に地域課題があり、その課題解決に向けて、必要な要素を洗い出し組み立てていくのが、コミュニティプランニングコーディネーターの仕事である。

地域社会には、近年の社会的課題の多様化・深刻化にともない、行政サービスだけでは対応しきれない社会的弱者の存在が顕著となっている。この人々に対しては、地域のきめ細かな課題に対応できる NPO のサービスを提供することが期待されている。NPO のサービスは 1998 年の NPO 法施行以来、質量ともに増加したが、その情報量の多さが、逆に適切な判断を下しにくい状況を作っている。地域のなかで散逸した大量な地域課題・NPO の情報から、必要なデータを出さなくてはならない。そのまま提供するだけでは意味がない。情報を分析し、文脈化し、情報を有効活用できる“かたち”に咀嚼して、必要とする人や組織的に確に渡すことのできる技術が必要である。更に、そうした NPO の情報を、社会的弱者とその支援者が入手し、活用することのできる体制を整備しなくてはならない。コミュニティプランニングコーディネーターは、「情報の目利き」である。

3. 育成講座の内容

情報を取捨選択し、判断のプロセスに市民が参加していくことを支援するプロセスを描き実現に向けてマネジメントしていくための力量をどのようにつけていくか。以下は講座の内容である。

〔対象〕 千葉県内の市民活動に関わる組織や団体（中間支援組織のスタッフ・就職希望者、自治会、ボランティアを受け入れている団体、施設のスタッフなど）

〔期間〕 4 ヶ月間

〔内容〕 次ページのカリキュラム参照のこと

4. 育成講座の効果

育成講座を通じて「地域課題を把握する力」「情報を収集し活用する力」「企画立案力」の 3 点のコーディネーションスキルと実践力をつけることを目標とした。そして、その目標が達成されていることを示す指標を「研修終了後に研修参加者の住む地域の課題解決コーディネートプランが出来上がっていること」に置いた。市民活動センターや社会福祉協議会での実地研修もカリキュラムとして取り入れた。これによって机上の空論で終わらない学びや気づきを研修参加者に提供することができた。実地研修後にコーディネートプランの内容が深まった参加者も少なくない。

「コミュニティプランニングコーディネーター育成講座 修了式」におけるコーディネートプラン・成果発表では、実際に 10 のコーディネートプランが発表された。なかにはすでにプランに基づいてプロジェクトが立ち上がっているケースもあった。育成講座が実践的なものであったことを示している。

コミュニティプランニング・コーディネーター育成講座 カリキュラム

	10～17時	内容（講師）
基礎領域	第1回	「コミュニティ再生のためのコーディネーターの役割」（安藤雄太） NPOの基礎知識、NPOの歴史的背景と市民社会で果たす役割を学ぶ
	第2回	相談技術のスキルアップする 初級編（小山淳子） 相談技術の基本を学ぶ。
	第3回	相談技術のスキルアップする 応用編（小山淳子） 実際の事例を材料にグループワークとロールプレイで学ぶ。
	第4回	ファシリテーションスキルを磨く（庄嶋孝広：市民社会パートナーズ） 会合や講座などを進めていく基本技術を身に着ける。
	第5回	ワークショップによる実現可能な企画立案の基本を学ぶ（山崎富一：NPO 法人笑顔せたがや）
専門領域	第6回	情報収集・ネットワーキング（小山淳子） 共感者・支援者を得、企画を実現していくためのプロセスづくりと必要な情報収集の方法について学ぶ。
	第7回	論理的思考による事業成果を引き出すためのプログラミング 内容のワークシートを使って、原因と課題と成果の整合性がとれる事業計画書の作成（矢代隆嗣：アリエールマネジメントソリューションズ）
	第8回	千葉県内での中間支援組織での実地研修
	第9回	被災地での現地研修
	第10回	課題解決のためのコーディネートプラン（森良） 「プロモーションができるコミュニティプランニングコーディネーターを目指す」

5. 今後の課題

①継続的にコーディネーターを教育する体制が整っていない
実際に市民活動センターや社会福祉協議会でコーディネーターを体験する実地研修もカリキュラムとして取り入れ、現場を見て知り体験することの有用性が高いことが明らかとなった一方で、受け入れ態勢の脆弱性も浮き彫りになった。受け入れ施設においても、それぞれのプログラム内容の質に大きなバラつきがあった。恒常的実践的な教育体制の整備と専門職養成の教育カリキュラムの確立は不可欠である。コーディネーターがその高い専門性・スキルを維持・開発していくことにおいても、日ごろからトレーニングできる環境と教育機関を整えておくべきであろう。

②コーディネーターが社会的に認知され活躍できる土壌がまだまだ育まれていない

高い専門性・スキルを持ったコーディネーターを養成しても、それを十分に発揮できるポジションやフィールド、チャンスなどが与えられなければ意味がないといえよう。歴史的にボランティアコーディネーターという呼称を用いて配属してきた社会福祉協議会に対して、公設の中間支援センターではコーディネーターを配置しているセンターは未だに少ない。社会福祉協議会においても、非常勤職員や、常勤職員でも兼職をしているなど、専門職としての位置付けをしているところは多くない。こういった実情を踏まえると、育成された人材がその力を発揮できる職域の開拓はこれからの大きな課題である。

一言コメント（編集長：森良）

持続可能な地域づくりのコーディネーターは、地域課題を住民・当事者自身が解決していくプロセスをプロモートできなければならない、という強い動機に裏付けられている。編集方針で述べた①参加型の地域づくりと②市民のエンパワーメントを推進していく力をつけるための講座である。

終了後もそれを保障していくための「同窓会」が行われている。講座は入り口であって、参加者同士がネットワークしてサポートしあうことが大切である。



団体紹介：CoCoT

CoCoTは、地域に住む人々が、自己決定力と課題解決能力をもち、市民自治を実現する社会を目指しています。そのためには「地域課題の解決のための市民参加の促進」「NPO・市民活動団体の支援と強化」が必要です。CoCoTは、市民、NPO、行政、事業者など地域の各主体をコーディネートすることで、この課題に取り組むとともに、担い手となるコーディネーターの育成に取り組む中間支援組織です。

あらためて ESD-J のご紹介

ESD-Jは、持続可能な社会をつくるためには「人づくり」や「教育」が大切との考えから、社会づくりに参画する力を育む教育や活動をESDと呼び、そのような取り組みが全国各地に広がることを目指して活動しているネットワークNGOです。環境・福祉・国際協力・青少年育成など、多様な分野の組織約100団体と、個人約300名が参画しています。

ESDとは、Education for Sustainable Development（＝持続可能な開発のための教育 / 持続発展教育）の略。2002年のヨハネスブルグサミット（持続可能な開発に関する世界首脳会議）において、日本はNGOと政府が共同して「国連ESDの10年」を提案し、実現しました（2005年～2014年）。

ESD-Jはこれまで、ESDを周知するための情報発信や研修事業、ネットワークミーティングなどを開催して、ESD実践者をつないできました。また政府に対してESDの推進体制づくりを働きかけ、円卓会議の設置（2007年）、ジャパンレポートの発行（2009年）などを実現してきました。

しかし、まだまだ学校教育の現場にも、地域づくりの現場にも、ESDは広がっているとは言えません。概念には共感できても、具体的な実践に取り組もうとした際、それらを支援する仕組みが十分には整っていないからです。

ESD-Jは、ESDの10年を機に、学校と地域が連携して進める参加体験型・問題解決型の教育実践や、多様な主体が参画する地域づくりにつながる生涯学習などが広がっていくことを目指しています。そしてそのためには、さまざまなテーマ、さまざまな立場の人や組織を、ESDの視点でつなぎ支援するコーディネーターが重要であると考えています。

ESDの10年の最終年まであと2年。ESD-Jは中間支援組織や社会教育施設などで活躍するコーディネーターの皆さんとつながり、ESDを各地で推進する仕組みと、コーディネーターがもっと活躍できる仕組みを作っていくとしています。具体的には、地域ごとに分野を超えたコーディネーターの交流や学びあいの場がもたれ、協力関係が育まれていること、そして、そのようなコーディネーターの雇用を支援する仕組みが、官民の協力によって構築されていることなどです。

またESD推進に取り組む大学や企業、行政機関等とともに、2015年以降ESDが本格的に広がっていくための仕組み（例えばESD推進センターの設立など）を検討し、形にしていきたいと考えています。

ぜひ仲間になって、一緒に仕組みづくりに取り組んでください。

(ESD-J事務局)

ESD-Jの2014年の目標

持続可能な社会・地域づくりのための人づくり(=ESD)
を支える仕組みをつくる

ESD全国センター構想

学校におけるESD推進

① 普及広報と、ESD実践者と推進組織がつながるインフラづくり

② 学校教育におけるESD推進の仕組みづくり

③ コーディネーターの育成とコーディネーターが活躍できる仕組みづくり

地域社会におけるESD推進



ESD-J事務局スタッフ
(国際PJ担当はリオ+20に出張中)

認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)

http://www.esd-j.org/ e-mail: admin@esd-j.org

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山B2F
TEL: 03-3797-7227 FAX: 03-6277-7554

編集: ESD-J「未来へつなく」制作チーム レイアウト: 河村久美



この印刷物は、平成24年度地球環境基金の助成を受けて制作されています。



この印刷物は、適切に管理された森林の認証木材から作られた紙と、輸送マイレージに配慮し、米ぬか油を使用したライスインキで印刷しています。